

黒い塔

小川未明

青空文庫

昔むかしのことでありました。ある小ちいさな国くにの女じよ皇おうに二人ふたりのお子こさまが
 ありました。姉あねも妹いもうともともに美うつくしいうえに、りこうでありま
 した。女じよ皇おうは、もう年としをとつていられましたから、お位くらゐを姉あねの
 ほうのお子こさまに譲ゆずろうと思おもつていられました。

そのうち、姉あねのほうめが、目めをわづらわれて、すぐめになられま
 した。いままで、花はなのよううつくに美うつくしかった顔かおが急きゆうに醜みにくくなつてしま
 いました。すると、女じよ皇おうは、いままでのようあねに、姉あねのほうめはか
 わいがられずに、妹いもうとのほうめをかわいがられるようあねになりました。

姉あねは、それをたいへん悲かなしみました。なにも自分の知しつたが
ではない。病びようき気でこんな醜みにくくなつたものを、なんでお母かあさま
はきらわれるのだろうかとなげきました。

しかし、妹いもうとの情なさけは、前まえとすこしも変かわりません。姉あねさんをう
やまい、なつかしみました。しかるに、不幸ふこうの姉あねは、ある日ひこと、
また、高たかい階かい段だんから落おちて、産うまれもつかぬちんばになつてし
まつた。

すぐめでさみにくえ醜みにくいといつてきらわれた、母ははの女じよ皇おうは、そのう
えちんばになつていつそう醜みにくくなつた姉あねのほうを、ますますうと
んぜられたのであります。そればかりでなく、妹いもうとまでが、姉あねをき
らうようになつたのであります。

これと反対はんたいに、妹いもうとの姫ひめはますます美しくなりました。花はなよりも、星ほしよりも、この世界せかいに見みられる、いかなる美うつくしいものよりも、もつと美うつくしく見みられたのであります。貴たつとい宝ほうぎよく玉たまも、その美うつくさにくらべることができなかつたのであります。

女じよおう皇こうの心こころは、いつしか、王おうい位いを妹いもうとに譲ゆずろうときめていました。けれども、この街まちの民たみはどう思おもうかと気きづかわれました。あたりまえならば姉あねが王おうい位いをつぐのが順じゆんじよ序じよでありますから、街まちの人ひと民みんは、なんと行って、反はんたい対たいすまいものでもなかつたのであります。

そこで、女じよおう皇こうは、街まちの人ひと々びとにこれを聞きくことにいたしました。すると、街まちの人ひと々びとは、

「それは、われわれどもが王さまをいただくなら、美しい妹うつくしいいもうと姫ひめのような女じよ皇おうが望のぞましいものでございます。醜みにくいお方かたは、なんとなく気き持もちが悪わるうございますから、どうか妹いもうとの姫ひめをいただききたいものでございます。」と、訴うえつました。

これをお聞ききになると、女じよ皇おうはだれの心こころも同おなじものだと思おもわれて、いまはなんの躑ちゆう躑ちよもなく、位くらを妹いもうとに譲ゆずることになさいました。

独ひとり、姉あねのほうは、さびしく、悲かなしくへやのうちに日ひを送おくられました。だれに向むかつて、訴うえつてみようもありません。さらばといいつて、このままこの城しろに長ながくいることもできないのでありましよう。いずれは、どこか遠とおいところに移うつされてしまふであろうと

おも
思うと、気がおちつくこともできません。いっそ、自分じぶんからこの
城しろを去さつてしまいたいのなどと思おもつて、毎まい日にち、窓まどぎわに立たつて遠とお
く、あてなくながめていられました。

この街まちには、昔むかしから、高たかい、不思議ふしぎな塔とうが立たつていました。だ
れがこの塔とうを建たてたものかわかりません。また、なんのために造つく
つたものかわかりません。人々ひとびとは気味悪きみわるがつて、かつてひとり
として、この塔とうの上うへに登のぼつたものはなかつたのであります。

このきみ悪い、白しろい塔とうが、ちようどこの姉あねの姫ひめの立たつていられ
る窓まどから、あなたに見みえたのであります。

夕暮ゆうぐれ方がたの光ひかりを受うけて、その塔とうは、謎なぞのように、白しろ壁かべや、煙え
突とつや、その他た工こう場じょうの建たてもの、雑ざつ然ぜんとした屋根やねなどが見み

える、街まちの中なかにそびえて、そこらを見下ろしていました。

いましも、ふと姉あねの目めが、この不思議ふしぎな高たかい塔とうの頂いたに止とまりま
すと、思おもいなしか、その塔とうが手招てまねぎするよような気きがしたのであり
ます。

「これは、わたしの目めのせいであらう。」と思おもつて、姉あねの姫ひめは、
いつてみるなどという妄もう想そうは断たたれました。そのうちうちに、日ひは
沈しずんで、静しずかな夜よは街まちの上うえにかかると、したがつて塔とうの影かげも見みえ
なくなつてしまいました。

毎日まいにちこうして、姉あねはへやのうちに閉とじこもつてきびしく日ひを送おくりました。母ははや、妹いもうとは、音おん楽がく会かいや、船ふな遊あそびなどに出でかけられるのを、自じ分ぶんだけは、ただこの窓まどから、遠とおくの空そらしかながめることができなかつたのです。どんなに海うみのながめは美うつくしかろう。どんなに花はなの咲さいている野の原はらのながめは美うつくしかろうと思おもつても、不ふ具ぐの身みは出でかけることもできませんでした。やがて、その日ひも暮くれかかりました。姉あねは、独ひとり窓まどから街まちの方ほうをながめていました。そのうち塔とうの頂いただきに目とが止とまると、またしても、その塔とうが自じ分ぶんを手て招まねぎするようないきがしたのであります。

「あの塔とうの上うえに登のぼったら、きつと海うみが見みえるにちがいない。」と、そのとき姉あねは思おもいました。そう思おもうと、しきりにいつてみたくな

りました。

明くる日、姉は、だれにも知れないように、苦心をして城からのがれ出ました。そして、町の人々に女皇の姫であるということを感じかねないようにして、塔の立っているところまでやってきました。

塔の周囲は荒れ果てていました。草が茫茫々としてしげつていました。幾十年このかた、だれも、この塔に上ったものはありません。町の人々は、この塔を幽霊塔と名づけていました。

けれども姉は、そんなことを気にかけませんでした。また、たとえ命を捨てるようなことがあつても、それを惜しまないと思いましたが、ただ一人で、その暗い、わずかにこわれかけた窓

からさしこむ、光線こうせんをたよりとして、一段一段上へと登のぼつてゆ
 きました。姫ひめは、日ひごろ自分の心こころを慰なぐさめる、小ちいさな豎琴たてこを携たずえ
 てゆくことを忘わすれませんでした。これだけは、つねに姫ひめの仲なかのよ
 い友ともだちであつて、月夜つきよの晩ばんに、花はなの下したに姫ひめを慰なぐさめたのでありま
 す。

暗くらい塔とうの中なかは、冷つめたい、しめつた空くう氣きがみなぎつていました。
 また階かい段だんには、人ひとの骨ほねだか、獸物けものの骨ほねだかわからぬようなもの
 が、散ちらばつていたりしました。姫ひめは、それらの上うへを踏ふんだりま
 たいだりして上のほつてゆきました。

やつと塔とうの頂ちようじよう上たつに達たつしますと、そこは体からだをいれるだけの狭せま
 いへやになっていました。もとより、ほこりがたまつていました。

あね
姉は、そこにすわりました。そして、その塔のいちばん高い窓か

ら四方をながめることができました。

そこからは、鏡のように光った海が見えました。街は目の下に

なつて、大きな建物も小さく見え、往来などは白い筋のよう

にかすんで、人影などは、ありのようになって見えたのです。

あね
姉の姫は、この景色をあかすながめていられました。そして、

持つてきた豎琴を弾じて独り心を慰めていました。

そら
空を飛んでいる小鳥は、この不思議な音色を慕つて、どこから

ともなく、たくさんこの塔の周囲に集まつてきました。そして、

その頂に止まつたり、また窓頭に降りてきて、音色に聞きとれ

ていました。

姫ひめは、これらの小鳥こどりを心しんから愛あいしました。そして太陽たいようが、だんだん西にしに移うつつてゆくのも忘わすれていました。

このとき、はるか、沖おきの方ほうから黒くろい雲くもが起おこつてまいりました。たちまち空そらは曇くもつて、墨すみを流ながしたようになり、風かぜがヒューヒューといつて空そらを吹ふいてきました。けれど、昔むかしから立たつている塔とうは、その風かぜのため**に**びくともいたしませんでした。姉あねの姫ひめは、この急きゆうにか変わった、ものすごい空そらの模も様ようをながめて、どうなることだろ**う**と案あんじていました。そして、たよりなく、塔とうの上うえで、独ひとり琴ことを鳴ならしていました。

大おお声こえに狂くるつて駆かける風かぜまでが、このいい琴ことの音ねに聞ききとれたとみえて、しばらくその叫さけび声こえを鎮しずめたのであります。

三

姫^{ひめ}は、だんだん心^{こころ}細^{ほそ}くなりました。いまは塔^{とう}を下^おりて帰^{かえ}ることもできないほどに、風雨^{ふうう}がつのつたのであります。しかたなく、姫^{ひめ}はこの心^{こころ}の悲^{かな}しみを琴^{こと}の糸^{いと}に托^{たく}して、いつまでも琴^{こと}を弾^ひいていました。

このとき、ふと目^めを上^あげて沖^{おき}の方^{ほう}をながめますと、真^まつ黒^{くろ}な壁^{かべ}を築^{きず}いたように海^{うみ}が浮^うき上^あがったのです。そして、ひどいとどろきをあげて陸^{おか}に向^むかって押^おし寄^よせてまいりました。

「つなみだ！」

と、姫は驚きの叫びをあげました。そして、じつと見つめていま
 すと、真つ黒な壁はだんだん近くなつて、街をはしの方からのん
 で、もつと押し寄せてきました。

姫はお母さまや妹のいるお城を見ながら案じて、どうかしてお
 母さまや妹の身の上に危害のないようにと祈つている間に、はや、
 真つ黒な壁はついにお城ものんで、もつともつと押し寄せてきて、
 街全体をのみつくして、かなたの野原の方まで、一面に海とな
 つてしまつたのです。

しかし、この不思議な高い塔だけは、波にさらわれずに昔のま
 まに立っていました。姫は一人で、その塔の頂に泣いていました。
 夜になつたらどうなるであろう。姫はとても命が助からないと

おも思つて、心こころ細ほそさに震ふるえていましたとき、灰はい色いろの海うみの上うえに一

その赤あかい船ふねが見みえました。

その船ふねは絵えにも見みたことのない、また話はなしにも聞きいたことのない

ような、きれいな不思議ふしぎな船ふねでありました。

赤あかい船ふねは、塔とうをめぐらしてだんだん近ちかづいてまいりました。姫ひめは

塔とうの窓まどからその赤あかい船ふねをながめて声こえをあげて救すくいを求めました。

すると赤あかい船ふねは、だんだん近ちかづいてきて、船ふねの中なかに乗のつていた

見慣みなれないふうをした人ひとは、塔とうの窓まどから姫ひめを救すくい出して、赤あかい船ふね

に入いれて、どこへともなく連つれていつてしまいました。

そしてその赤あかい船ふねは、まったく姿すがたを地ち平へい線せんのかなたに消けして

しまいました。

海の水はますます増してきて、その夜のうちに、塔ものみつくしてしまいました。明くる日になると、一面に海となつていました。もう、昔の街は跡形もなかったのです。

風だけは、悲しい叫びをたてて海の上を吹いていました。小鳥は、いまもなお姫のゆくえをたずねて、夏になると北へ、冬になると南へ、旅をして、あわれな姫を探しています。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

※表題は底本では、「黒《くろ》い塔《とう》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

黒い塔

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>